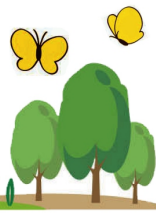




ちょっとそこまで～お散歩日和(植物編)～



エ ノ キ

春つばき 夏はえのきに 秋ひさぎ 冬はひらぎに 同じくはきり

これは、漢字の覚え方として言い伝えられているもので、それぞれ「椿(つばき)・榎(えのき)・楸(ひさぎ)・柊(ひいらぎ)・桐(きり)」を表しています。この中で、「楸」だけはよく分かりませんが、調べてみると、樹木名としては「アカメガシワ」だろうとのことでした。

さて、ここで取り上げたいのは季節柄、「木へんに夏」ということで「榎」ということになります。

当団地に関しては、敷地内ではないのですが、隣接する夏の雲小学校職員通用口脇・第一団地集会室前・第三団地地下駐車場出入口正面にあります。夏の雲小学校については、もっとあるように思いますが、樹高が高くてははっきりと判別できませんでした。



第三団地地下駐車場出入口前



第一団地集会室前



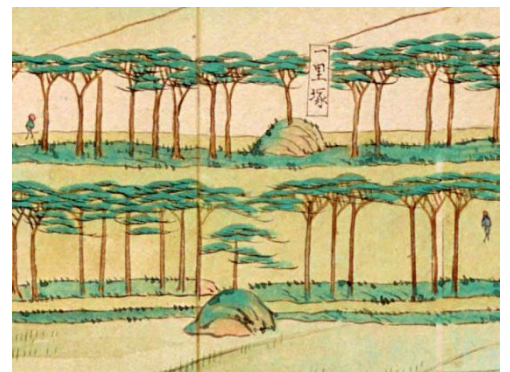
練馬区立夏の雲小学校前

エノキの名前の由来については、Wikipediaによれば、

- ・縁起の良い木を意味する「嘉樹(ヨノキ)」が転じてエノキとなった。
 - ・秋にできる朱色の実は野鳥などが好んで食べることから、「餌の木」からエノキとなった。
 - ・枝が多いことから枝の木(エノキ)と呼ばれるようになった。
- などの説が紹介されていました。

なぜエノキを「榎」と書くのかについては、江戸時代に整備された一里塚をもとに説明すると分かりやすいように思います。

一里塚とは、旅行者の目印として大きな街道沿いに1里(約3.927km)毎に設置した塚(土盛り)のことです。一里塚の大きさは5間(約9m)四方、高さ1丈(約1.7m)に土を盛り上げて造られ、一里塚の上には主に榎が植えられました。これは、木陰で旅人が休息を取れるように配慮されたことと、植えられた樹木が築いた塚の崩壊を根で防ぐことに拠ります。



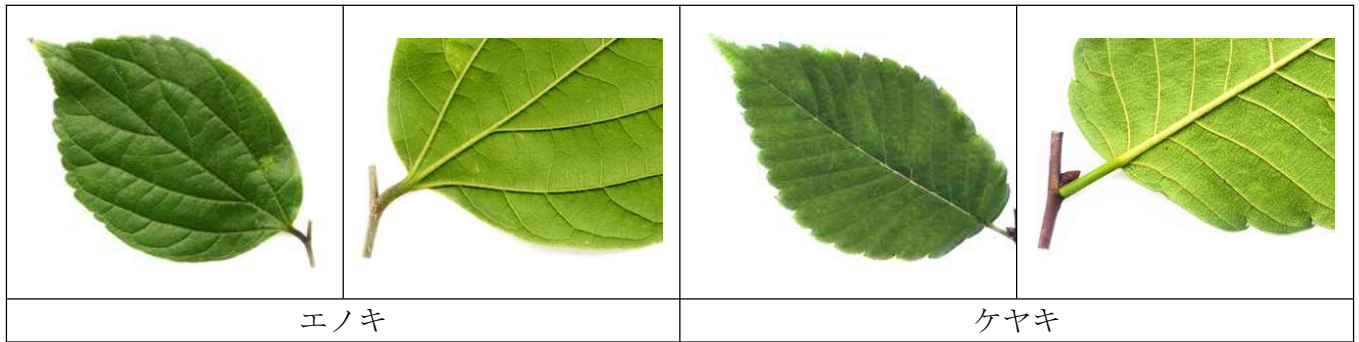
日光道中絵図より

その旅人にとって、特に夏の日射しの下での旅路はきつかったことでしょう。そんな時に木陰の心地良さをもたらす「榎」はさぞインパクトがあったはずです。まさに「椿」が春を告げる時期に花を咲かせることから生まれたように、まさに秋になると紅葉が美しい「楸」のように、まさに花の少ない初冬の白い花を咲かせる「柊」のように、それぞれの季節に印象深い樹木としての地位が与えられたのです。

練馬に散在する屋敷森を見ていると、同じニレ科のケヤキとエノキが混在しています。その上、いずれも大木になり遠方からでもよく目立つし、何よりも姿がよく似ています。

最も簡単な識別法は葉脈の違いを見ます。エノキは三行脈と言い、葉柄からいきなり3つに分岐して

いて、しかも左右不対象となっています。それに対してケヤキは並行脈で、葉縁にまで達しています。



また、冬木立ちの姿からも判別できます。ケヤキは、樹冠が扇を開いたような形になります。これは、枝の分岐が少なく小枝が長くなる性質によります。一方、エノキは、丸くこんもりした樹冠になります。すぐ枝分かれするため枝が短く、分岐の角度も60度くらいで直角に近いので枝が混むのが原因です。



ケヤキ



エノキ

最初は区別しづらいですが、意識して見るように心がけると、次第にその違いが分かってきます。譬えるならば、若いアイドルの顔が識別できないとか、最近の車を見分けられないとかと同じです。年齢のせいではありません。意識と関心の差です。

東京都内ですぐに思い浮かぶ榎絡みの名所と言えば、板橋の「縁切り榎」、王子の「狐火と装束榎」、そして、神宮外苑の「御観兵榎」でしょう。これを機に訪ねてみるのもよろしいのではないのでしょうか。

(終)



王子の狐火と装束榎